

秋水通信

第23号

2017.12.8

幸徳秋水を顕彰する会
四万十市右山五月町 8-22
四万十市立中央公民館
TEL0880-36-2778 (田中)

HP:<http://www.shuusui.com/>
mail:zen-tanaka@heart.ocn.ne.jp

幸徳秋水と幕末維新先人 史跡めぐり

十一月十二日、顕彰会主催で「幸徳秋水と幕末維新先人史跡めぐり」を行いました。

去年は秋水だけを対象にしましたが、今年も「志国高知幕末維新博」開催に合わせ、秋水につながる中村の先人たちも加えました。

市広報で告知し、高知新聞にも記事にしてもらい、市民ら三十八名が参加。岡山からの参加もありました。

まず集合の公民館から市役所マイク口バスで羽生山墓地登り口へ。町を見下ろしながら歩いて上へ。高齢者もいるので心配したが、みんな元気。元禄二年、中村藩は將軍綱吉の命で改易になる。以降の中村は、町人中心



安岡良亮先祖墓



藤倉忠吉墓

の町となった。

一條家の学問を受け継いだ「一條南学」の祖、町人出身学者遠近鶴鳴、その教えを受けた樋口真吉や初代熊本県令安岡良亮の先祖（祖父隼太、父良輝）らの墓へ。神風連の乱で殉職した良亮の墓は熊本にある。

また、商人として幕末をたくましく生き、多くのとんち話を残し、いまでも中村名物お菓子として有名な泰作さん（中平泰作）、自由党活動家から大逆事件当時中村町五代目町長になった藤倉忠吉墓も。

山を下りたあとは、秋水生家跡から秋水漢学の師木戸明邸（遊焉義塾）へ。木戸家現当主秀雄氏（明ひ孫、顕彰会



木戸明邸跡

会員）から庭に入れてもらい、当時の塾の模様などを資料に基づき説明を受けた。塾では漢学だけでなく、西洋訳書も教えていた。隣が安岡良亮邸跡。

為松公園では秋水絶筆碑を説明。ほかに木戸明、樋口真吉、藤倉忠吉の各顕彰碑も。真吉については、公園入口の生家跡（現駐車場）も。郷土資料館（お城）はリニューアル工事中（来年三月オープン）のため入れなかった。

正福寺墓地では、秋水はじめ幸徳一族墓、坂本清馬墓、木戸明一族墓をそれぞれ説明。毎年一月二十四日秋水墓前祭への参加も呼びかけた。最後は図書館秋水資料室へ。

秋水は商家の出（俵屋）。樋口真吉、安岡良亮は下級武士（郷土）だが、遠近鶴鳴（宇和屋）から学ぶ。木戸明（吸田屋）、藤倉忠吉（堺屋）も商家。

江戸期の中村を支えた町民文化の流れの中に、秋水を位置付けることができるのではないか。そんな視点を考えさせられた。

参加者から顕彰会入会申し出もあり、また天気にも恵まれ中身の濃い秋の一日であった。

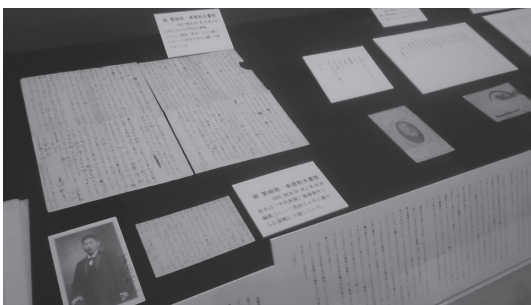
秋水岡繁樹宛書簡

高知県立文学館では開館二十周年特別企画として、九月二十三日～十一月十二日、幸徳秋水がアメリカ、サンフランシスコにいた同郷（高知県安芸芸市）の同志岡繁樹へ宛てた書簡、葉書七点を展示しました。

秋水は明治三十八年（一九〇五）十一月、筆禍事件からの出獄後渡米します。その直前に出したもので、十月四日付書簡では平民社の解散を伝えるとともに、「甥の幸徳幸衛を連れて行くので、サンフランシスコでの職の世話をお願いできないか」と頼んでいる。

秋水はアメリカ滞在八カ月で帰国するが、幸衛は絵の勉強がしたいと残る。幸衛のその後については、四ページ「画家幸徳幸衛の家族たち」に書いています。

県立美術館では幸衛の絵画を展示中（来年一月十四日まで）です。



高知県立文学館展示

元会長 二人逝く

幸徳秋水を顕彰する会二代目会長（二〇〇七～二〇一五）北澤保さん、三代目会長（二〇一五～二〇一七）久保知章さんが今年続けて亡くなられました。お二人は昭和十三年同年生れでした。

謹んで哀悼の意を捧げ、お二人の経歴等を紹介させていただきます。

北澤 保さん



1971年足摺岬 左より
北澤さん 神崎清 大河内一男
神近市子 坂本清馬 橋田庫欣

二〇一七年十月九日没、七十九歳。昭和十三年十月、中村生まれ。

中村高校では剣道部に属し、チームは県大会団体優勝をするほどの強豪で、本人は三段。

高校卒業後は地元中村郵便局に入る。全通労働組合で精力的に活動。真面目、誠実、几帳面な性格から、仕事でも組

合でも周りの信頼を得たまとめ役であった。

地元労組の協議体である中村地区労では長く会長を務め、一九八〇年代、総評解体による路線分裂以降も中村地区労はそのまま統一した形で残り、いまでも統一メーデーが行われているのは北澤さん接着力によるところが大きいことは、関係者の見方が一致するところ。そんな北澤さんは、土佐人にしてはめずらしく酒が飲めなかった。

北澤さんは郵便局を定年退職後の二〇〇一年、六十二歳の時、社会民主党から中村市会議員に出馬し当選し、議員を四期、あゆみ共同作業所やシルバー人材センターの設立にもかかわり、それぞれ会長を務めた。

幸徳秋水顕彰運動では常に先頭にたつてこられた。戦後解放されてから秋水の顕彰運動を担ってきたのは中村の労働組合。毎年一月二十四日の秋水刑死日に墓前祭を始め、いまに続いている。

二〇〇〇年、顕彰運動を組織化した幸徳秋水を顕彰する会を結成、初代事務局長に、その後二〇〇七年、森岡邦廣会長の後を継いで二代目会長になられた。

北澤さんは七十歳になられたころ、十万人に一人ともいわれる難病、消化管間質腫瘍（胃ジスト）にかかられた。高知の医療センターで開腹手術。以降も手術の繰り返しで、術後は四万十市民病院に移り、容体が安定してから自宅に帰るといふパターンであった。本人の申し出があり、二〇一五年五

月の総会で顕彰会会長を引かれ、久保知章さんにバトンタッチされた。

「保ちゃん」とまわりから呼ばれ親しまれてきた笑顔を、いまは天の上から降り注いでくれている。

久保 知章さん



2016年 秋水墓前祭

二〇一七年六月十六日没、七十八歳。昭和十三年八月、幡多郡三原村生まれ。宿毛高校から大阪府立大学農学部獣医学科に進まれた。

卒業後は明治乳業に入社、釧路工場専属獣医師として北海道の酪農家を助ける仕事をされた。

いま四万十市と友好交流をしている別海町での仕事が一番印象に残っていると、よく言われていた。

高知県に帰ってからは三原村隣の大月町役場の獣医に。さらに一九八三年、中村市東町に小動物を対象にした中村動物病院を開業。

久保さんはふるさとへの思いが強く、乞われて二〇〇五年、三原村村長選挙

に出て当選。しかし、二期目は無念であった。

大柄でふつくらとしたとても温か味もある人柄であるばかりでなく、見識と情熱を備えているヒューマニストだった。動物にもやさしく、赤ひげのような獣医さんであった。トンボと自然を考える会会長にも就かれていた。

大学時代、六〇年安保反対運動に参加した経験から、反戦平和の元祖、地元の幸徳秋水を尊敬していた。人へのやさしさでは秋水と共通していた。

幸徳秋水を顕彰する会結成以降ずっと役員を務められ、副会長にも。そして病氣治療に専念する北澤会長に代わって、二〇一五年五月総会で三代目会長に就いていただいた。

本人は「わしゃあ、秋水先生のことには勉強不足じゃけん」と遠慮されていたが、久保さんが適任であることはみなの方の見方の一致するところだった。

しかし、ほどなく好きなカラオケでよく演歌「幸徳秋水」を歌っていた喉の奥にかなり進行した食道ガンが見つかった。それでもニコニコして今年一月の秋水墓前祭では挨拶されたので、本当なのかと疑うほどであった。

しかし、会長を宮本博行さん（市会議員）に交代した五月の総会にはやはり出席ができないほどに深刻な状況になっていた。

最後の二年間、無理をお願いしたのではないかとみな心苦しいが、久保さんはそんなことは気にするなど、いままごろ北澤さんと一緒に、尊敬する秋水に会っていることだろう。

総会、秋水ひ孫墓参

秋水顕彰会今年度総会を五月十四日、市立中央公民館で開催。新会長に宮本博行さん（市議員）を選出した。この総会に幸徳秋水ひ孫の小谷美紀さん（埼玉県草加市）を招待した。

美紀さんは、秋水最初の妻西村ルイ（旧久留米藩士正綱娘）が秋水に離縁された後ひそかに産んだハヤ子がのちに小谷清七と結婚して生んだ長男（小谷正昭）の次女にあたり、生前のハヤ子とずっと一緒に暮らしてきた。

ハヤ子の存在が一九八二年朝日新聞スクープで世に知られた時、美紀さんは中学生。社会科学教科書に出てくる人物が自分のひいじいさんとわかりびっくりしたそうだ。

社会科学の先生に呼ばれいろいろ聞かれ、学校では注目の人になったという。ハヤ子は翌年亡くなったが、お婆あさんはしつけなどがきびしい中に、気品をそなえていたという。美紀さんに見せてもらった弟さんの写真は、秋水そっくりである。



小谷美紀さん秋水墓参

昨年五月には秋水孫二人（ハヤ子の長女、次女。美紀さんの伯母）も秋水墓参に来ているので、秋水の血を引く身内三人目の中村訪問となった。

美紀さんは最初に正福寺秋水墓でじつと手を合わせた。秋水生家跡、絶筆碑も案内し、市立図書館内秋水資料室では、顕彰会で用意をした西村ルイ写真を美紀さんの手で秋水写真の下に展示してもらった。

秋水の後の妻、師岡千代子、菅野須賀子の写真等は以前から展示をしているが、西村ルイ関連の展示はこれまで何もなかった。新聞各社の取材もあり、大きく報道された。秋水の子を残した妻として、秋水の生涯を知ろうえでも、貴重な展示となった。

美紀さんには総会で挨拶してもらい、夜の交流会でも会員と懇親を深めてもらった。四万十川佐田沈下橋にも案内した。

美紀さんはフェイスブックの自身プロフィールに秋水ひ孫であることを公開しており、またブログでも秋水の記事を時々書いている行動派である。顕彰会にも入会。これからも交流を深めていきたいと願っている。



西村ルイ写真を展示

秋水研究会

毎月第二日曜日、午後一時半より、四万十市立中央公民館で開催中。

市広報にも掲載。会員でなくとも参加自由。ぜひご参加を。無料。

問い合わせ、尾崎清
090・9458・7833

今年のテーマと今後の予定。

2017年

1月 近代民主思想の系譜

― 龍馬・兆民・秋水 ―

2月 西村ルイ（秋水最初妻）ゆかり

の福島県安積訪問報告

3月 平沼騏一郎と大逆事件

4月 安岡良亮とその一族

5月 共謀罪学習講演会（田中肇高知短大名誉教授）

6月 秋水「自由党を祭る文」

7月 秋水「田中正造天皇直訴文」

8月 徳富蘆花「謀反論」

9月 熊本近代史と土佐

10月 大逆事件と熊本

11月 幸徳秋水と幕末維新先人史跡めぐり

12月 Iターン組四万十市と秋水を語る

2018年（予定）

1月 日本の憲法と幸徳秋水

2月 秋水を支えた義兄駒太郎

3月 山縣有朋と大逆事件

ご案内

■ 幸徳秋水刑死

107周年墓前祭

日時 2018年1月24日（水）

午後0時30分〜1時過ぎ

場所 四万十市中村 正福寺

記念講演会

時間 午後2時〜4時

場所 市立文化センター大会議室

講師 田中全（顕彰会事務局長）

演題 中村町民文化と幸徳秋水



画家幸徳幸衛の家族たち

田中 全

幸徳幸衛の絵画がいま高知県立美術館コレクション展「高知の洋画」の中で展示されている。(十月十八日〜来年一月十四日)

幸衛は幸徳秋水の甥で兄亀治の子。亀治の死後秋水に引き取られ、東京で一緒に暮らしていたが、明治三十八年十一月、十五歳の時、秋水に連れられアメリカサンフランシスコに渡った。

秋水は八か月後帰国したが、幸衛は絵の勉強がしたいと残る。しかし、まもなく秋水は大逆事件で刑死。身内としてアメリカでも迫害を受ける中、結婚、子ども二人できたが、単身パリに修行に出た後、昭和四年一人でシベリア経由二十七年ぶりに中村に帰る。

帰国後も地元で風景画などを描き続けたが、昭和八年、四十三歳で病没した。アメリカの家族には会えないまま。

こうした幸衛の生涯については、幸衛母方(木村家)の従弟木村林吉が書いた『眼のない自画像』(二〇〇一年、美術の図書三好企画刊)に詳しい。

幸衛遺品は中村在住の木村家縁者田中和夫氏(顕彰会会員)が所蔵していたが、



幸衛自画像

このほど県立美術館に寄贈。絵画七点ほかスケッチブック、スーツケースなどが展示されている。

幸衛は秋水刑死後、号を「死影」と称した。展示の中の代表作、パリで描き木村著の書名にもなった自画像は、社会から白眼視され、踏みつけられた人間の崩された顔であり、大逆事件は秋水だけでなく一族の人生をも歪めてしまったという、暗黒社会の變(ひだ)に触れるような凄みがある。

私は木村著を読んで以降、幸衛がアメリカに残した家族がその後どうなったのかずっと気になっていた。

幸衛は大正十年、三十一歳の時、ロサンゼルスで高橋松子と結婚。松子は日系二世で英語がしゃべれるので重宝がられ、早川雪舟が手掛けていた米国映画の脇役などに出ていた女優であった。すぐに明子、光が生まれ、ささやかな幸福をつかんでいた。パリへ送られてきた、幸衛の身を心配する松子の愛情あふれる手紙が何通も遺品の中に残されている。

しかし、幸衛はパリで旅券を二度も紛失し、アメリカへ帰ることがかなわないまま日本へ。どんな思いだったか。朝鮮からは特高警察の尾行がついた。

妻とは離婚。木村はアメリカに捨てられた形となった家族のその後のことは触れていない。田中和夫氏によれば、木村は幸衛家族の消息までは調べなかったよ



幸衛と松子
木村林吉著より

うであり和夫氏自身も知らないという。私は今回の展示を機に、その消息を知りたいと思った。

各方面に問い合わせた結果、現在ロス在住の光の息子 Russel タカシヤマザキ(六十四歳)にたどりつくことができた。タカシは日本語が話せないで、少し話せる妻(日系)から何回かに分けて電話できかせてもらった話は以下のようなものであった。

夫が日本に帰ってしまった Martha 松子は、やむなくヤマザキと再婚。新たに男の子も一人できた。その後、日米開戦により一家は敵国人としてアリゾナキャンプ(収容所)に入れられた。さらに四十五歳のころ夫が交通事故死。

五十歳の時、三度目の結婚をカワムラとした。松子は晩年も明るく、よくしゃべり、孫タカシの結婚式ではダンスも踊った。一九九七年、九十七歳で没。

その三年前には、ロサンゼルスタイムズのインタビュで「私の最初の結婚は見合い(arranged)であったが、うまくいかなかった(less than satisfactory)」と語っている。

Robert 光はアリゾナキャンプから米国陸軍情報部(MIS)へ入り、戦後まもなく東京へ。部隊ははっきりしないが、通訳や翻訳の仕事をしていたというから(CEOではないだろうか。(確認はとれていない))東京に十三年いる間に結婚、二人の子(ミンノ、タカシ)が生まれた。帰国後は政府関連のエンジニアの仕事をしていた。

二〇〇七年没。墓はロスの軍人墓地。光の姉 Dolores 明子はロスで暮らしていたが、夫ヤマシタをガンで失ってからは次のパートナーとハワイへ。長い間リユーマチを患い、最後は車イス。二〇〇〇年没後はハワイ大学に献体、一年後海に散骨された。娘一人がロスにいる。

妻子三人の中で光だけが中村の父の墓を訪ねている。最初は東京からひそかに。

二度目は一九八〇年、ロスから家族で。

光は自分らを捨てた父に対してどんな思いだったのだろうか。中村在住の田中和夫氏等の縁者には接触しなかったように、秋水顕彰会の記録にも残っていない。

しかし、このほど高知市在住であった幸徳富治娘池三春(二〇一〇年没)の家族に聞くと、三春は生前アメリカのヤマザキと交流があり、チョコレートなどが送られてきたことがあったという。

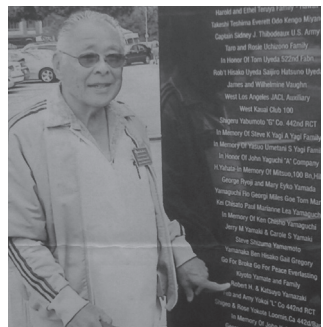
また、東京在住の秋水姉寅(牧子)の孫今井君代(一九八五年没)の家族からも同じ話を聞いた。ヤマザキとは光のことだろう。きっかけは一九八〇年来日の際ではないかと思われるが、詳しい経緯はわからない。今回調査中「Kotoku Yuki」
<http://www.7note.com/yukie/yukie.html>
なる Website を見つけた。

松子の姉の孫 Rick Tagawa (ニューエーク在住)が制作したもので、戦後の松子、光明子などの写真がアップされている。

今回一番驚いたのは光が米軍に入隊していたこと。かつて秋水は将来の日米戦を予想したが、まさか自分の身内が米軍に入るとは思っていなかっただろう。

光の息子タカシがいま住んでいるロスの家には、幸衛の絵が一枚飾っているという。ロスのダウンタウンの風景というから、幸衛がパリに渡る前に描いたものである。ほかの絵もあるそう。

いつか、それらの絵を見せてもらう機会が来ることを願っている。



息子 Robert 光
website より